

学年通信 第二号

平成23年7月27日

明秀学園日立高等学校 第3学年



盛夏の候、皆様方にはいよいよご清栄のこととお喜び申し上げます。

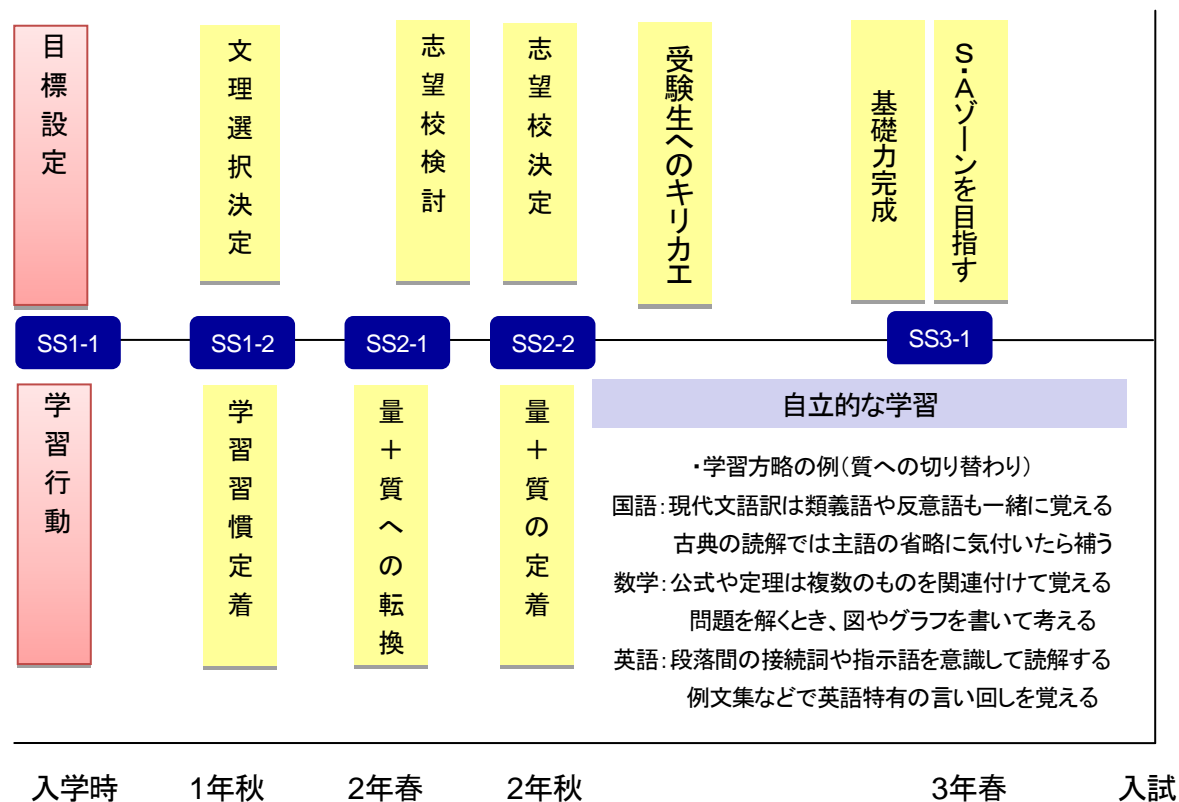
明秀日立生(白梅)の諸君。「明るく・清く・凛々しく」の建学の精神に照らし合わせ、それに適うよう日々を過ごしていますか。白梅への道標である校訓を日々実践していますか。「やるからやる気が出る」を実感していますか。そして、挨拶や手伝いを習慣化していますか。

第二号は諸君の「学力」を切り崩しつつ「学問のすすめ」の論を進めたい。この号も目に付くところに貼り付けておくこと。まずは読みなさい。

『光陰矢の如し。少年老いやすく学成り難し』諸君！思索にふけり、垣根を越えよ。

受験生諸氏へ告ぐ

—まずは、現在地点を確認すること—



諸君の現在位置を SS2-2 まで遡(さかのぼ)らせよう。この時期は志望校を決定し、学習量に加え、その質を上げ、定着させるべき時期でした。意識を受験生のそれに切り替え、3年生に至る前に基礎力完成に向け努力を始める時期

でもあり、春休みまでに1, 2年次の学習内容を総チェックし、基礎を固めなければなりません。これまで楽をしていた人は大変だったはず。日頃の努力を惜しなかった諸君には、はっきりと指標が見えていたことと思います。

さて、現在位置は SS3-1 です。基礎力を完成し S・A ゾーンを目指す時期にあります。基礎固めはいうまでもなく教科書です。教科書、過去の考査問題、実力試験、模擬試験で弱点を確認、克服し、二次試験対策へ向け、準備万端めかり無く、わき目も振らずに努力するのがこの夏です。(資料: ベネッセコーポレーション)

—一般試験受験者の諸君へ—

心機一転し、新鮮な気持ちで課外に臨み、毎時間最初の3分間に授業への意識を集中して見入る(聴き入る)ことです。そうすれば課外は期待以上の成果をもたらします。

自主学習は、課外の内容をその日のうちに必ず復習して自分のものにする。そして、自分で立てた学習計画の実施です。

老婆心ながら、学習計画は長いスパンで立てないこと。長くてもせいぜい一週間。その日にやるのが帰宅する前にダイアリーにメモされていればOK。後は、決めたことは確実にこなす。それだけです。

課外がない日は、計画より遅れた部分を取り戻すこと。二次試験の時間配分に合わせて学習することを勧めます。例えば、国数英の三教科各100分ずつで試験間休みが20分なら、その通りに1日2セットやるとかね。勿論、20分休みにゴロゴロしたりしない。片付けをしたりとか、茶碗洗ったり、風呂掃除するなど、手伝いをして体を動かし、やる気を次に繋げる行動をとること。

—A0、推薦入試受験者の諸君へ—

この夏最低でも下に挙げる本を3冊読みなさい。

「原発事故はなぜくりかえすのか」高木仁三郎(岩波新書)

「原子力発電」武谷三男(岩波新書)

「原発の闇を暴く」広瀬隆、明石昇二郎(集英社新書)

「原発はいらない」小出裕章(幻冬舎ルネッサンス新書)

「原発を終わらせる」石橋克人(岩波新書)

「大震災の中で私たちは何をすべきか」内橋克人(岩波新書)

「取り返しのつかないものを取り返すために」大江健三郎、内橋克人、他(岩波ブックレット)

その他、図書館便り7月号に紹介されている原爆関係書籍から選んでください。

我々は今、この惨禍の後をどう生きるべきか、原発をどうするべきか、ひいては今後どのような社会を目指すべきかの問いに対し、しっかりと見識を持ち合わせていなければなりません。内容をまとめ、自分の考えを持つておくべきです。受験以前の問題ですが、受験で問われないわけがありません。通信第一号も再読を。

—採用試験受験者の諸君へ—

書店で「高校生の就職試験一般常識問題集」なるものを一冊購入し、この夏全問解き終えること。解き終えるとは後に疑問を残さず、すべて理解、覚えてしまうまで繰り返し解くことです。

該当する問題集が見当たらないときは、最低でも中学校の数学と国語の教科書を3年分やり直すこと。国語のやり直しとは、教科書を読んで書けない字、読めない字の書きとり、意味の取れない言葉の意味取りをすること。採用試験の内容に応じて必要教科を復習してください。

諸君の学力は本当に低下しているか

—皮肉な結果こそ自然の摂理に適っているということ—

余りくどくどと話をせず、短く分かりやすくできればよいのですが。諸君は小中学校でいわゆる「ゆとり教育」

を受けてきた世代です。詰め込み時代の生徒に比べ、諸君の学力は低下したと言われています。しかし、当事者である諸君、「ゆとり教育」がその原因だと安直に結論づけるのは誤りです。それは地球温暖化の原因が「温室効果ガス」にあるというのと同じです。温室効果自体は地球にとって必要不可欠なものです。勿論それを担う天然のガスも。

我々人類は、地球温暖化の原因を「温室効果ガス」にすり替え、対処療法的にその表層に現れた問題の低減を図ってきましたが、低減を図ったがゆえに連鎖的に次の問題を生じさせてしまいました。問題の根源に光を当て、目を向けるのではなく、表層に浮かび上がった気泡に目を凝らしてきました。

二酸化炭素、メタン、一酸化二窒素、六フッ化硫黄、ハイドロフルオロカーボン類、パーフルオロカーボン類が京都議定書で取り交わされた削減対象の温室効果ガスです(これくらいは覚えておこう)。6つの内、後ろの3つがフロン類、最後の2つは代替フロンと呼ばれるものです。フロンの主な役割はご存じの通り、冷媒です。冷蔵庫やエアコンの冷媒に使用されていました。フロンが放出され上空へ到達すると紫外線によって分解され、塩素原子が外されます。塩素原子は一粒で約10万個ものオゾン分子を破壊することが分かりました。これによって生物にとり有害な紫外線を地上にまで到達させることとなるオゾンホールが形成されました。慌てた先進国はフロンの代替となる冷媒を早急に開発せねばなりませんでした。生み出された代替フロンは塩素を持たず、オゾンを破壊することはなくなりましたが、しばらくすると大変なことが分かりました。皮肉なことに代替フロンは二酸化炭素の数百倍から数万倍以上の温室効果ガスだったのです。これは、自然の摂理に適う結果と言えるでしょう。自然界にない物質、人工物を使用すれば、何某(なにがし)かの代償を支払うことになるのです。

大変な温室効果を持つ代替フロンに置き換えてまで維持しなければならなかったもの。それは産業です。ひとつの産業が停滞するということは、直接的にはその産業に関わるすべての人達の生活を停滞させるということになります。間接的には、国民すべてに影響が及び、経済に大打撃を与えることでしょう。どんなことになるか想像が付きますね。近代主義は既得権益を手放すことなく、フロンに変わる塩素原子を持たない人工冷媒を造り出す道を選びました。

教育もそうです。詰め込み教育の弊害は確かにあった。しかし、「ゆとり教育」の理念と実践法が浸透するまで教育を停止させることはできません。それに加えて、たとえ学習指導要領がどんなに優れていたとしても、近代化した社会がそれを受け入れるに十分な変容を遂げていなければ教育効果は期待できません。(例えば、教育は学校や家庭だけでやっていけるものではなく、次代を担う世代を育成しているという自覚が地域にも醸成されているということ。言い換えれば、地域が公共圏として成り立っているということです。)当初から異論もあり、現場教師の十分な理解を得られないまま実施に踏み切った事情も斟酌しなければならないでしょう。ところどころで積極的な実践が無かったわけではないのですが、2002年度開始の学習指導要領はそれまでの学習内容の3割削減を目玉に、すべての生徒が基礎力を養成すべきという時代の要請によって実施に踏み切ったものの、その理念が浸透していくことはありませんでした。

今、「ゆとり教育の弊害」として「学力の低下」が叫ばれています。しかし、諸君の「学力」は本当に低下しているのでしょうか。一体、諸君の何を持って「学力」と呼んでいるのか。低下しているとすれば、どんな側面なのかを検証していかねばならないでしょう。

文部省が40年前から学習指導要領の改定の度、教育内容を削減して来たことを考えれば、学力低下はやむを得ないことと言えますが、実は、小中学校の生徒の学力低下を実証する調査結果は存在しません。「基礎学力」においては、昨年A、Bコースで実施したマナトレ確認テスト(基礎編)の結果から、諸君の多くが基礎力を十分に培っていることがわかりました。さらに「学力の実態」を知る調査(教育課程実施状況調査)では、計算や事実の暗記や公式の応用に関する力では過去の調査結果と遜色ないことがわかっています。ただし、この調査では創造的な思考や問題解決的な思考や表現力を問う問題では正答率が激減していることがわかりました。もし諸君に学力低下があるとすれば、この点に集約されるのではないかと思います。国際的な調査「国際数学・理科教育調査」からも基礎的内容に関する問題には強いが、創造的な多義的な思考や推論的な思考においては弱いという特徴があることが指摘され、諸君の学力低下の傾向を裏付けていると言えます。

「ゆとり教育」の教育課程には具体的な方針が2つありました。「学習量の3割削減」と「総合的な学習と選択科目の時間の導入」です。学習量の3割削減により、基礎・基本を徹底し、総合的な学習の時間と選択科目によって基

礎・基本の実践と応用に充てる計画だったのです。それまでの詰め込み教育の弊害を解消する狙いもありました。詰め込み教育の弊害、つまり「落ちこぼれ」をつくらないためにそれまでの学習内容を3割減らすことで基礎・基本を全員に必ず分かってもらえるようにすることを約束していました。主食が「基礎・基本の徹底」で、おかずが「総合的な学習の時間」に喩えられました。主食のご飯だけでは食べ残す子供が出ますが、魅力に富んだおかずを付ければ全部残さず食べてもらえると考えたのです。「基礎・基本の徹底」を通して「学ぶ意味」や「知の楽しさ」を身に付け、「自ら学ぶ力」を養成する教育を目指しました。

ところが諸君を見る限りにおいて、その多くは基礎的内容に関する問題には強いとしても、創造的な多義的な思考や推論的な思考においては弱く、「学ぶ意味」や「知の楽しさ」を身に付け「自ら学ぶ力」が養成されているようにはお世辞にも言えません。

地球温暖化は、経済を停滞させるどころか、新自由主義によるエネルギー政策を後押しする原動力に利用されてしまいます。原子力発電です。原発は他の発電に比べ発電コストが安くCO₂排出も無く、地球温暖化防止にも貢献し、大気汚染の原因となる窒素酸化物や硫黄酸化物を排出しないクリーンな発電システムであり、温暖化を喰い止めるうってつけのシステムだと喧伝されていきました。しかし、実は熱効率が極めて低く(つまり無駄が多く)、海に排熱するために海水温を上げ、結果的に地球温暖化をもたらしているとも言われています。使用済み核燃料の廃棄処分にかかる費用等を含めればランニングコストは跳ね上がってしまいますし、放射性廃棄物の処理にも課題が山積みです。原発は、そうした課題の解決を先送りにして運転が始まった代物なのです。核廃棄物の深地層処分のCMが流れていたのを覚えているでしょう。しかし、その最終処分地も実はまだ決まっていないのが実情です。問題を先送りにし、将来の技術革新で解決しようとしていました。条件が揃わない限りにおいて人間には制御不能の代物をです。

何故、「ゆとり教育」は目論見通りに行かなかったのか。オゾンを破壊するフロンを撤廃して、代替フロンを造り出したら、大変な温室効果ガスだったという、皮肉でありながら自然の摂理に適った結末(地球が長い年月に渡って持ちえなかった物質を人工的に生み出してしまうと、地球はその処理能力を持ち合わせているわけがないということ)に酷似しているような気がしてなりません。人工物で代替しても、問題が置き換わるだけなのです。所詮(しょせん)教育は人工物。かつての学習指導要領(人工物)を新しい学習指導要領に置き換えても、例えそれがどんなに優れた施策でも、葉が毒になるように、行動に移す(使用する)人間次第でそれは逆の効果を生み出してしまいます。どんなに優れた思想でも、行動に移す(使用する)人間次第で戦争のイデオロギーに変えられてしまうことを歴史は我々に教え示してくれています。諸君はそのことを忘れてはなりません。

かつてチェルノブイリで事故が起こったとき、原子力発電をギリシャ神話「パエトーン」に例える人がいました。起こっては欲しくない現実が隠蔽され、人々の思考や常識が意図的に誤った方向に誘導され作りあげられた原子力の「安全神話」も最悪の形で崩れ落ちてしまいました。「ゆとり教育」の施行にあたっても幾分かその嫌いがあったように思えます。

思えば、戦争に使われた核エネルギーを平和利用の名の下に発電に利用すること自体、欺瞞以外の何物でもありません。今回は、書きながら癪に触っていけない。腹立たしいとともに我が不明を恥じるばかりです。

(参考資料：「21世紀の教育はこうなる」寺脇研、「学びからの逃走」、「学力を問い直す」佐藤学)

次号に続く。

(あとがき)

この第二号は、二年次の学年通信第五号として春休みに向けて発行される予定のものでした。テーマである「学問のすすめ」も、第一号から繋がるよう本編に大幅に手を加えています。どのあたりに手が加わったのか、推測しながら読んでみるのも面白いかもしれません。

8月6日と9日、広島と長崎で行われる平和式典を視聴してください。私から皆さんへの夏休みの課題です。